平成 21 年（2009 年）12 月 1 日

廃棄物学会ニュース

No.113
廃棄物資源循環学会

Japan Society of Material Cycles and Waste Management

廃棄物学会は、2008 年 12 月 1 日から一般社団法人廃棄物資源循環学会となりました

第20回研究発表会開催報告

廃棄物学会から数えて 20 回目、一般社団法人廃棄物資源循環学会として初めての研究発表会が、平成 21 年 9 月 19 日(木)～21 日(土)の 3 日間、名古屋大学において開催された。名古屋での開催は、1998 年以来 11 年ぶり 2 回目である。例年より約 2 ヶ月早い 9 月開催となったため、秋空と言うにはまだ少し早い、暑さの残る中での研究発表会となった。

名古屋大学豊田講堂を特別シンポジウム会場、ポスター会場とし、口頭発表には、豊田講堂に 2 会場、IB 電子情報館に 5 会場の計 7 会場が用意された。各会場ともに、発表用の機材が良く整っており、研究発表はとてもスムーズに行われた。メイン会場の豊田講堂と IB 電子情報館の間の移動には 5 分程度を要したが、この 2 つの建物は、地下鉄名古屋大学駅を間に挟んで見通しの良い丘の上下の位置関係にあり、円滑な移動が出来たと思われる。

参加者数は、表 1 に示すように 765 名であり、残念ながら前回大会を約 20%下回る結果となった。景気低迷や新型インフルエンザの流行、他学会との重複が多い 9 月開催などがその原因と考えられた。発表件数は 335 件（口頭発表 193 件、ポスター発表 142 件）であり、昨年とほぼ同数であった。口頭発表、ポスター発表のいずれにおいても、熱心な質疑応答が行われていた。優秀ポスター賞は、学術研究委員会による厳正な

表 1　研究発表会参加者受付数（名）

正会員	561	(680)
学生会員・登録団体市民会員	99	(138)
非会員	81	(129)
国際セッション	24	(13)
合計	765	(960)

※カッコ内は前回京都大会

審査の結果、次ページ表 2 の通りとなった。学生を中心に若手研究者の受賞が目立っており、今後の活躍を期待したい。

今回の研究発表会では、生物多様性をキーワードとした特別シンポジウムの他、14 件の「企画セッション」が開催された。この企画セッションは、従来は小集会として行われた各研究部会の企画に加え、実行委員会企画 3 本を加えたて衣替えしたものである。また、国際会議 R'09 に続く同一会場での開催、アジア太平洋廃棄物専門家会議 SWAPI の併催、韓国廃棄物学会からの多数の参加による国際シンポジウム等、例年に増して国際色豊かなものとなった。さらに国際セッションでは、口頭発表からポスター発表に続くハイブリッドセッションも好評であった。

第 20 回研究発表会を無事に終えることができたのは、会場準備・運営にご尽力をいただいた東海・北陸支部を中心とする実行委員会の皆さまはじめ、たくさんの方々のご協力の賜です。この場を借りて厚くお礼申し上げます。　　（学術研究委員会 肴倉宏史）

表２　優秀ポスター賞一覧

優秀ポスター賞（一般 6 件）

B5-4　ショッピングセンターから排出される乾燥食品残さを肥料に用いたサラダナの養液栽培法の開発
名古屋大学　○青山 ちひろ、高野 雅夫　(独)野菜茶業研究所　篠原 信

B5-7　UASB 法による生ごみ可溶化液のメタン発酵処理における SS 濃度の影響
創価大学　○米本 光治　創価大学 長尾 宣夫、丹羽 千明、戸田 龍樹

B8-1　多様な有機性廃棄物から水素生成可能な植種微生物の獲得に向けた検討
龍谷大学　○中村 拓郎、山本 陽介、井上 愛子　大阪大学 澤村 啓美　龍谷大学 石垣 智基

B9-4　新規高温メタン発酵リアクターによる無希釈生ごみ処理―滞留時間及び回分方式における処理性能の挙動解析―
長岡技術科学大学　○賀澤 拓也、小松 俊哉、山口 隆司　大成サービス(株)　中村 明靖、浅海 博基　大成建設(株)帆秋 利洋

C4-9　紫外線照射による一般廃棄物焼却灰に含有される鉛の不溶化メカニズムの検討
福岡大学　○藤川 拓朗、佐藤 研一　(独)国立環境研究所　肴倉 宏史

D7-6　管理型最終処分場の廃止基準に関する考察 (6)
埼玉県環境科学国際センター　○長森 正尚　(独)国立環境研究所　山田 正人　龍谷大学 石垣 智基　日本工業大学 小野 雄策

優秀ポスター賞（国際 4 件）

FA-2　Recent Development in Waste Plastics Recycling in Korea
○Woo Zin CHOI, Eun Kyu PARK (The University of Suwon) Nae Joon PARK, Bam Bit JUNG (Seohung En-Tech)

FA-4　Solid Waste Management at Neighborhood Level in Jakarta, Indonesia
○Akino Midhany Tahir, Sachihiko Harashina (Tokyo Institute of Technology), Mitsuo Yoshida (JICA)

FB-13　Effect of salinity on the bio-ethanol fermentation process from food wastes
○Seung-Mi JEONG, Gil-Sun JIN, Mi-Jin KIM, Yong-Jin KIM,Dong-Hoon LEE (Mokpo National Maritime University)

FD-10　Current Status of Disposal Site in Phnom Penh
○Sethy Sour (Department of Environmental Science, Royal University of Phnom Penh, Cambodia)

平成21年度廃棄物資源循環学会賞候補者募集

廃棄物資源循環学会表彰規程に基づき、平成 21 年度廃棄物資源循環学会賞の推薦募集をいたします。下記要項により、奮って推薦応募されますようお願いいたします。

推　薦　要　項

1　表彰の種類

(1)廃棄物資源循環学会大賞
本学会の進捗、当該廃棄物事業の発展に貢献し顕著な功績があった者

(2)廃棄物資源循環学会功績賞
本会の運営に顕著な功績があった者

(3)廃棄物資源循環学会有功賞
廃棄物学に係る技術等の進展に顕著な功績があり、画期的な業績をあげた者

(4)廃棄物資源循環学会論文賞
廃棄物学において独創的な研究・開発並びに技術に関する論文の発表により、当該学術・技術に関する著作の発表により、当該学術、技術の進捗発展に顕著な功績があった者

(5)廃棄物資源循環学会著作賞
廃棄物学に関する著作の発表により、当該学術・技術の進捗発展に顕著な功績があった者

(6)廃棄物資源循環学会奨励賞
廃棄物学のうち、限定された範囲項目についての独創的な学術・技術・製品などで画期的な業績をあげた者

2　受賞候補者の資格
廃棄物資源循環学会賞受賞候補対象者は、個人又はグループ及び団体とする。個人の場合は原則として本会会員とし、グループ(5 名以内)の場合、グループの中に本会正会員が 1 名以上参加し、対象業績に主要な役割を果たしていること。また、団体は原則として、本会の公益会員及び賛助会員とする。

3　候補の範囲
表彰種別のうち廃棄物資源循環学会論文賞、同著作賞及び同奨励賞については、受賞候補年度よりさかのぼり、原則として 2 年以内に功績又は業績をあげた者とする。廃棄物資源循環学会大賞と同功績賞及び同有功賞については、期間に制約をおかない。

4　推薦の制約
同一の候補者に対して、同一の推薦者が 2 つ以上の賞の候補として推薦することは認めない。

5　応募方法
本会正会員 3 名の推薦によるものとする。

6　表彰の方法
表彰審査委員会で慎重に審査のうえ、入賞者には表彰状及び記念品を贈呈する。

7　表彰の時期
表彰は平成 22 年度廃棄物資源循環学会総会において行う。

8　提出書類
申請には本会所定の廃棄物資源循環学会賞推薦書様式に従って、必要事項を記載し、1 件につき正 1 通、副 2 通(コピーで可)の 3 通を提出する。

9　提出締切日
平成 21 年 12 月 25 日　(金)　必着厳守

10 推薦書の請求・提出・問合せ先
廃棄物資源循環学会事務局　表彰担当

■□　東北支部　■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

平成 21 年 8 月 19 日

東北支部総会・講演会開催報告

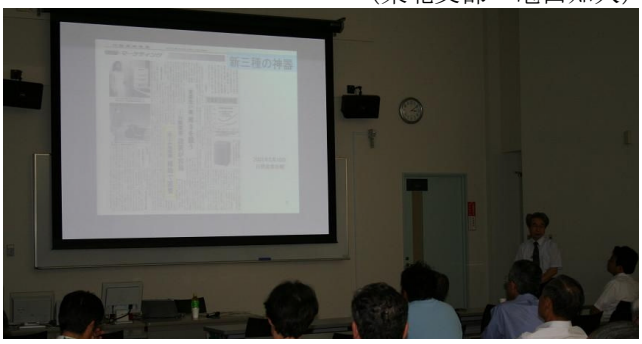
平成 21 年 8 月 19 日（水）、東北大学大学院工学研究科総合研究棟において、平成 21 年度東北支部総会・講演会が開催された。

総会は、46 名の出席者及び 50 名の委任状提出者を受け、会則の定める定数を得て成立した。総会では、始めに、平成 21 年度役員人事（案）の説明があり、支部長を三浦隆利教授（東北大学大学院工学研究科）、副支部長を大沢利昭氏（仙台市環境局）、幹事長を吉岡敏明教授（東北大学大学院環境科学研究科）とする新体制が承認された。その後、平成 20 年度事業報告及び会計報告が行われ、それぞれ承認された。次いで、平成 21 年度事業計画（案）及び予算（案）の審議が行われ、いずれの議案も原案通り承認された。続いて、昨年に引き続き 2 回目となる第 2 回廃棄物資源循環学会東北支部研究発表会の開催要領（案）が提示され、技術研鑽と情報交換の場として、エコプロダクツ東北 2009 と共催で、平成 21 年 10 月 16 日（金）夢メッセみやぎで研究発表会を開催することが承認された。

講演会では、始めに、東北生活文化大学　西野徳三教授（東北大学名誉教授）より「アシドロコンポスト研究の広がり～家庭用小型処理機から大型プラントへ～」と題する基調講演がなされた。アシドロという名前は、家庭用生ごみ処理機の改良の過程で、処理が酸性で進行する事からラテン語の“酸性”に由来して命名し、商標登録したものであること、アシドロ方式の家庭用生ごみ処理機（1～3 kg/日）はすでに国内で約 3 万台弱普及、業務用は 5～500 kg/日が上市されており確実に機能していること、開放系の大型処理プラントの実証試験の結果など、幅広い研究成果が紹介され、活発な討論がなされた。続いて、産業廃棄物、家庭ごみに対する自治体の取組みが紹介された。宮城県環境生活部　加藤睦男氏から「産業廃棄物税について」と題する講演があり、税導入の背景、宮城県における税、使途事業、産業廃棄物の状況等が紹介された。また、仙台市環境局　及川英人氏から「家庭ごみ等有料化導入の経緯と現況　これからの施策方針」と題する講演があり、有料化導入の背景・目的、有料化の実施にいたるまで、不適正排出・不法投棄対策、有料化実施後の状況等が紹介された。両講演に対して活発な質疑応答がなされた。

講演会終了後、交流会が行われ、廃棄物資源循環に関する、会員相互の情報交換、意見交換が行われた。

（東北支部　亀田知人）



■□　九州支部　■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

平成 21 年 9 月 5 日

九州支部平成21年度・市民フォーラム

平成 21 年 9 月 5 日(土)午後、熊本大学工学部百周年記念館において九州支部の平成 21 年度・市民フォーラム「ごみについて徹底討論しよう！！」with　GPN－持続可能な社会を将来世代につなぐため－　が開催された。今回の市民フォーラムは、熊本市で初めて開催されたが、参加者は 47 名であり盛会となった。

最初に、話題提供として九州 GPN 幹事・環境カウンセラー(市民部門)荒木正信氏から「３Ｒ推進活動はグリーン購入から」と題して、３Ｒとグリーン購入の考え方、グリーンコンシュマー活動等について大変分かりやすく説明していただいた。

次に、熊本学園大学國瀧ゆかり氏から「ウォーターオフセットの取り組み」と題して、熊本学園大学におけるエコキャンパス委員会の取り組みの概要と熊本の白川中流域で行われているウォーターオフセットの概要について話題提供がなされた。このウォーターオフセットは、自分たちが使う地下水を地下水涵養農地で育てられた米を購入することで相殺する「カーボンオフセット」の地下水版である。

続いて、鹿児島大学法文学部大前慶和准教授から「環境活動の実践」として、鹿児島大学で行われている持続的な環境啓発活動等の報告や、体験型環境学習の実践について、話題提供がなされた。

最後に、北九州市立大学大学院国際環境工学部松本亨教授から「グリーン購入による環境への効果」として、国におけるグリーン購入による環境保全性の効果や最近の動向についての話題提供がなされた。

その後、会場の参加者で雨の日の傘袋の問題やリサイクル瓶を復活させる方法などについて楽しく、自由で活発な議論が行われ、ごみついて考える有意義な 1 日となった。

今回の熊本市での開催にあたり、熊本大学古川憲治研究室に会場設営等で大変お世話になりました。

（九州支部　小松健一）

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■　中国四国支部　□■
平成 21 年 9 月 11 日

平成21年度「中国四国支部見学会」開催報告

平成 21 年 9 月 11 日（金）、広島県東広島市において一般廃棄物埋立処分場等の施設見学会が開催され、約 20 名が参加した。

まず、賀茂環境センターにて一般廃棄物コンクリートピット・被覆型（クローズドシステム）処分場および浸出水処理施設、リサイクルプラスチック等選別・圧縮施設の概要について説明があり、活発な質疑応答が行われた。その後、選別・圧縮施設や処分場の被覆施設などの見学を行った。選別・圧縮施設では、実際のペールを間近に見ることができ、処分場では実際に遠隔操作による搬入処理対象物の投入を見ることもできた。

次に、西条駅周辺の白牡丹酒造と賀茂鶴酒造の見学を行い、酒造工程の副生成物の量や販路、さらに精米やろ過技術とそこから発生する廃棄物の再利用の状況などについての説明を受け、質疑応答が行われた。西条地区の歴史的町並みを散策でき、西条の文化と歴史に触れることもできた。

その後、西条駅周辺で懇親会が和やかに行われ、リサイクルの話などに花を咲かせながら、親睦を深めた。

（中国四国支部　奥田哲士）

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■　北海道支部　□■
平成 21 年 9 月 16 日

バイオエタノール製造施設見学会報告

平成 21 年度北海道支部の施設見学会は、平成 21 年 9 月 16 日(水)に開催された。

今年度の見学は、道内で、地球温暖化の原因の二酸化炭素削減に向け、ガソリン代替燃料となるバイオエタノール製造の大規模な取組が開始された施設の見学をすることとした。道内では苫小牧市と清水町の２カ所で取組が行われている。オエノンホールディングス苫小牧工場は、政府輸入のミニマムアクセス米を原料としているのに対し、ホクレンや道内経済界の出資により設立された北海道バイオエタノール(株)の十勝清水工場は、道内で生産された余剰ビートや規格外小麦を原料にエタノールを製造している。どちらの施設を見学するか迷ったが、道産子としては、当然、十勝清水工場を見学することにした。当日は、札幌から清水町までは、約 170 キロメートル、長時間、バスに揺られなければならないという悪条件にも関わらず、27 名の参加があった。

十勝清水工場での見学は、担当者からの施設の概要などの説明に対し、参加者の質問が 30 分近くも続く熱心な意見交換が行われた。工場では、夏は規格外小麦、冬は余剰ビールを原料にキリンビールで使用している酵母によって、純度 99.5%のエタノールを年間 1 万 5 千 kl 製造する計画となっている。今年４月からの試運転では、約 3 千 kl が製造されたとのことであった。

また、エタノール製造後の残渣は、脱水、乾燥され飼料製品として出荷され、残渣の脱水により発生した排水からはバイオガスを回収し、工場のボイラーの燃料として使用されている。工場は、農林水産省のバイオ燃料地域利用モデル実証事業として平成23年まで稼働することとなっている。ただし、清水工場で製造されたバイオエタノールの販売は、全て道外で行われており、道内での販売の目途は立っていない。道内はもちろん、地元で販売できる仕組みが望まれる。

1 時間の見学のために､往復で 9 時間近くもバスに揺られたわけであり、大変疲れたが、現場の方の生の声を聞かせていただき、大変有意義な見学会であった。

（北海道支部　津島正緒）

【お知らせ】

廃棄物資源循環学会主催

平成21年度廃棄物資源循環学会シンポジウム
低炭素社会をめざす廃棄物処理のあり方

日本は 2050 年までに世界の温室効果ガス排出量を50%削減しようという長期目標を提唱し、世界共通の目標として支持されている。G8 ライクラ・サミットではこの一部として、50 年までに先進国全体で 80%以上削減する目標が掲げられた。一方、京都議定書の目標である 6%削減に対して、日本の 2005 年度の排出量は基準年より 7.8%上回っており、第 1 約束期間（2008 年～2013 年）での達成は非常に困難になりつつある。

このような状況の中で、廃棄物処理についても温暖化対策の強化が求められている。京都議定書目標達成計画では、2010 年度のエネルギー起源二酸化炭素の排出削減量を積算する際に、ごみ発電の導入量を 417 万 kW と見込んでいるが、2005 年度の総発電能力は約 152 万 kW にとどまっており、エネルギー回収能力の一層の増強が求められている。また、収集運搬をはじめ、廃棄物処理・資源化の一連の過程におけるエネルギー利用の効率化、施設の長期利用など、システム全体の効率化を図る必要がある。

本シンポジウムは、このような認識のもと、低炭素社会をめざす廃棄物処理のあり方を展望し、技術的・制度的課題とその対応策を議論することを目的とし、企画した。

1．開催時期　平成 22 年 2 月 18 日(木) 13 時~17 時
2．開催場所　専売ホール
　東京都港区芝 5-26-30 専売ビル 8 階
　JR 田町駅三田方面口徒歩 5 分
　地下鉄三田駅慶應大学口徒歩 4 分
3．共　　催　3R 検定実行委員会
4．概　　要
■基調講演　「低炭素社会を展望する」
　西岡　秀三　氏　(国立環境研究所特別客員研究員)
■パネルディスカッション
「低炭素社会をめざす廃棄物処理のあり方」
◎コーディネーター
　松藤　敏彦　氏　(北海道大学)
◎パネリスト
　森口　祐一　氏　(国立環境研究所)
　山川　　肇　氏　(京都府立大学)
　角田　芳忠　氏　(株式会社タクマ)
　高岡　昌輝　氏　(京都大学)　※予定
5．参加費　　会員 3000 円（非会員 4000 円）
　※参加費は当日受付でお支払い下さい
6．参加申込方法
　廃棄物資源循環学会事務局まで FAX でお申し込み下さい(申込用紙はホームページに掲載しています)。

廃棄物学会ニュース No.113　平成 21 年 12 月 1 日発行
一般社団法人廃棄物資源循環学会
〒108-0014 東京都港区芝 5-1-9 豊前屋ビル 5F
Tel.03-3769-5099　Fax.03-3769-1492　http://jsmcwm.or.jp
印刷媒体は古紙を配合した再生紙を使用しています

研究支援事業（若手渡航助成）について

廃棄物資源循環学会学術研究委員会では,若手会員の積極的な研究の取り組み,海外で開催される学会での積極的な研究発表を支援する目的から,渡航や滞在に関わる費用を助成する事業を行っています。平成 22 年度の応募受付期間は、平成 22 年 3 月 1 日～4 月 30 日です。詳細はホームページをご覧ください。

http://jsmcwm.or.jp/kenkyu/shien.html

会　員　状　況	H21.10.31 現在 (　)内は、H21.4.1 以降の増減
正 会 員	2,770　(-41)
学生会員	290　(+34)
外国人会員（DM）	23　(±0)
登録団体市民会員	6　(-1)
公益会員	97　(±0)
賛助会員	126　(-3)
計	3,312　(-11)

注）外国人会員(DM)は、一般社団法人廃棄物資源循環学会外国人会員規程第 5 条に定める会員を示す。

事務局だより

世界中で愛される手塚治虫の不朽の名作『鉄腕アトム』をハリウッドが CG アニメ化し、60 カ国で公開されるそうだ。日本では平成 21 年 10 月 10 日より全国で公開されている。『鉄腕アトム』と言えば、谷川俊太郎作詞の主題歌（空を越えて　ラララ　星のかなた～）を思い出す方も少なくないだろう。私は詩を読むのが好きだが、谷川の詩集もお気に入りが数冊ある。小説は文庫本になるのをじっと待つのに比べて詩集は財布の紐が緩くなり、ハードカバーを躊躇なく買う。思うに、私にとっての詩集は、印刷された詩の内容以外にも、本の装丁、字の大きさ、余白と文字数のバランス等々の＋αの要素が重要なものであるようだ。さて、廃棄物学会ニュースが印刷板からホームページへの掲載に移行、メールでのニュース配信の開始、論文誌の電子ジャーナル化への移行等、必要な情報を必要とする所に迅速に届ける為の試みが進んでいる。私にとっての詩集のように、ただ内容を伝えるだけではなく、その媒体が紙（あるいは豪華装丁？）が望ましいものもあるだろう。広報部会として、それぞれに相応しい情報提供・発信方法を検討していきたい。　（日浦 朋子）

廃棄物資源循環学会事務局からお知らせ

事務局業務は、平成 21 年 12 月 29 日から平成 22 年 1 月 4 日までお休みとさせていただきます。

廃棄物学会ニュース（印刷・郵送版）は今号が最終号となります。今後の発行予定については、次ページをご覧ください。

※学会ニュースはホームページに掲載しています。

2009 年 12 月 1 日

＜廃棄物資源循環学会会員の皆様へのお知らせ＞

今後の学会広報について

広報担当理事　片柳　健一

学会ニュースの 5 ページでご案内のとおり、本学会発足以来発行を重ねてきた廃棄物学会ニュースは、今までの形式では今号をもって発行を取りやめることと致しました。このことは、前 112 号において「学会ニュースの抜本的な変更と郵送による提供を取りやめる予定である。」とのお知らせをいたしました。その後、編集委員会と協議を重ね、学会広報の今後のあり方及び学会ニュースにつきましては、平成 22 年から下記のようにさせていただくこととなりました。

１．学会ニュースの変更と学会誌への一部移行

学会ニュース発行の当初からの目的は、学会誌を補完して、会員へ迅速に情報を提供することであり、学会が行なっている活動の最新の情報や、各種イベント等の開催通知、開催されたイベント等の概要報告を主に行なってまいりました。一方、編集委員会では、学会広報の根幹である学会誌については、和文論文誌を分冊化する替わりに内容を更に充実させることを計画していました。

そこで、編集委員会と広報部会とで協議を行い、学会が開催したイベント等は内容を詳しく記述して会員に提供しかつ記録に残す必要がある、との結論に至り、従来は概要のみを学会ニュースの限られた紙面で報告していた学会の各種活動報告を学会誌に移し、会員に詳しく報告することといたしました。

したがって、広報部会では、今後は会員へ迅速に周知しなければならないイベント開催等の案内や重要事項のお知らせを主に行うことし、例えば、来年 1 月には会長の新年挨拶、第 11 期役員選挙など、近々開催されるイベント等の案内、連絡事項等を掲載する予定です。広報の方法は、学会ホームページのトップに「学会ニュース」という欄を設けこれらの情報の見出しを載せ、そこをクリックすると内容が見られる方法と致します。また、従来行っていた一部会員への学会ニュース印刷版の郵送は今後行いません。

２．今後の学会広報活動について

広報部会が行ってきた学会ニュースの形式による広報活動は、上記のような変更となりますが、さらに今年度から本格的に運用が開始されたメールニュースの配信方法の改善を検討しています。そのため、今まであいまいであったメールニュースシステムの管理を広報部会で行ない、①各委員会、支部、研究部会に決めていただいた広報部会担当者と連絡を密接に取り合いながら、各機関が会員に提供すべき情報をメールニュースを利用して迅速に提供する、②メールニュースを無制限に使用することを避けるため、広報部会で利用の規約、利用の手引きを作成し、それに従って各情報担当者が利用していただく、等の仕組みを構築いたします。

このような理由により、従来形式の学会ニュースは、この 113 号が最後となります。そして、当面の学会情報の広報は、学会誌、ホームページ、メールニュースによって行います。しかし、この方法はベストではありませんので、改良すべき点は数多くあります。また、学会外部への広報も重要であり、廃棄物関連のマスコミや他の関連団体と連携した広報についても検討していく所存です。今まで長きにわたって発行してきた廃棄物学会ニュースへ記事を寄せていただいた方々、編集に携わっていただいた方々には深く御礼を申し上げるとともに、会員の皆様方には学会広報のあり方について忌憚のないご意見をお願いいたします。